

くす通信

第257号
2022年7月1日

国立病院機構熊本医療センター 発行

病理診断科より

病理診断科とは 良性？ 悪性？ どうやって診断しているの？

7月



「くす(樟)」の由来について

くす(樟)は常緑の広葉樹で、熊本城内に多く見られます。種々の精油成分を含み、良い香りがします。樟脳をはじめ色々な薬用成分が抽出されるなど有用な薬用樹でもあります。

また、くすし(薬師)とは、医師のことを指し、くすしぶみ(薬師書)は医術に関する書物のことを言います。

本誌はこの「くす」にあやかり、健康な生活を送るために情報を提供しております。お気軽にお読み下さい。

病理診断科から説明!

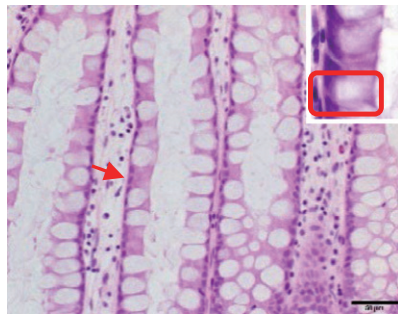
良性？ 悪性？ どうやって 診断しているの？



病理診断科部長
柳田 恵理子
やなぎだ えりこ

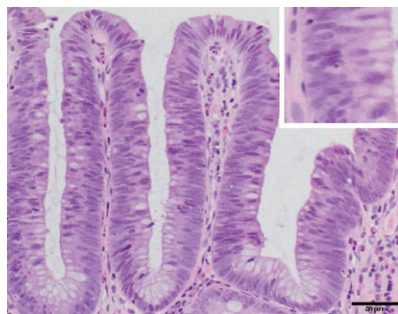
ここでは「病理診断科とは」に続いて、良性の病気として大腸腺腫、悪性の病気として大腸癌を例にもう少し詳しくどのように診断をしているかについてお話をしたいと思います。

まず、写真のAは正常な大腸粘膜です。右上にさらに拡大した写真をそれぞれつけています。拡大部分の赤線で囲った細胞が大腸粘膜の上皮細胞1個分です。矢印が示す小さな紫色のものが核と呼ばれるもので、1個の細胞には1個の核があります。核も細胞も規則正しく並んでいるのが正常の特徴です。



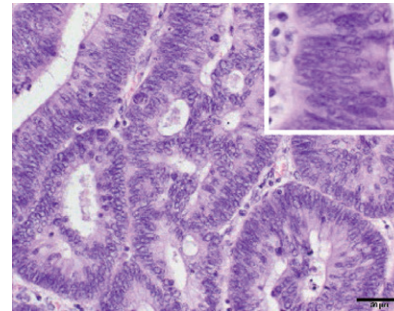
A. 正常の大腸粘膜

次のBはおもて面でも登場した大腸腺腫の一種である管状腺腫です。Aの正常に似たまっすぐな形は残っていますが、一部は歪んで



B. 管状腺腫(良性)

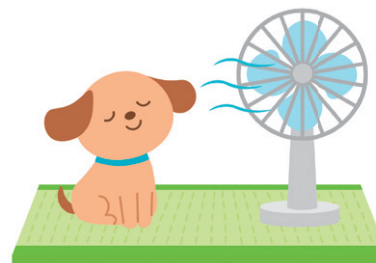
いますし、核が長細く大きくなっています。正常に似ている部分もありますが、細胞が少し大きくなって、そして数も増えているのが、腺腫の特徴です。Cの癌になると、まっすぐな構造は激しく崩れ、ぼこぼこ穴が開いているような構造になり、核が重なってしまうほど増えています。Aの正常の大腸粘膜とはかけ離れた構造になっているのが癌の特徴です。



C. 大腸癌(悪性)

病理診断は、血圧や血液検査のように決められた数値以上は病気というような、絶対値による評価ではありません。病理診断においても評価基準はあり、それは顕微鏡で観察したときに見てわかる形の違いです。正常と比較して、どう変化しているか、かけ離れているか形の違いを観察し、良性や悪性の判断をしています。

実際には形の違いだけでは、診断がとても難しいことや診断にたどり着けないこともあります。そのようなときは画像の情報や遺伝子の変化など複数の情報を総合して、正しい診断・最適な治療を患者さまにご提供できるように診療にあたっています。



病理診断科とは

病理診断科部長

やなぎだ えりこ

柳田 恵理子



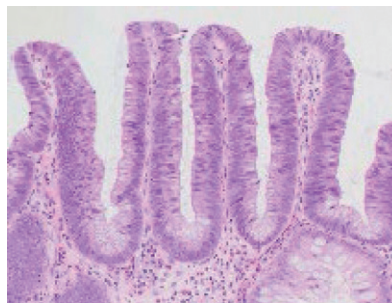
病理診断科という名前をお聞きになられたことはありますか？患者さまが直接ご自身で受診されるところではないため、あまり知られていない科ですが、病気の部分から採取した細胞や組織を顕微鏡で観察し、診断を行う科です。

今回この場をお借りして、検診のある項目で「要精密検査」となった場合を例に病理診断科の役割をご紹介したいと思います（検査機関や病院による違いがあることをご了承ください）。

もし、検診の便潜血検査（便の中の少量の血液成分を検出する検査）で陽性の判定が出た場合には、精密検査として大腸内視鏡検査が勧められます。大腸内視鏡検査では、消化器内科の医師が内視鏡を用いて、便に血液が混じる原因がないか、すなわち腸のどこかに出血源がないか、腸の状態を詳細に観察します。出血の原因になるような部分があるとそこから数ミリ程度の組織が採取されることがあります。内視鏡の性能や技術の向上は目覚ましく、内視鏡検査の時点で診断がつくことも多いのですが、診断の確定や確認、治療方針の決定のために組織の採取が行われます。

ここからが病理診断科の出番です。診断のためには、採取された組織からガラス標本というものを作製し、顕微鏡でこの標本を観察する必要があります。以下の写真は実際の顕微鏡像です。大腸の上皮細胞が増殖し、明瞭な管状の構造を形成しており、「管

状腺腫」と呼ばれる良性の上皮性腫瘍です。大腸を通過する便がこの腺腫に当たることで、便潜血陽性になることがあります。病理診断科から「採取された組織は管状腺腫で、悪性の所見はありません。」という診断を受け取った内科医は、その結果を患者さまにお伝えするとともに最も適した治療方針をご提案することになります。



管状腺腫（良性）

つまり、病理診断科とは名前のお通り病気の理由を診（みて）判断する科です。正しい治療には正しい診断が必要です。患者さまに直接対面することのない診療科ですが、患者さまのお役にたつ情報を提供することが最大のやりがいです。



病理診断科の紹介

病理診断とは、患者さまから採取された細胞や組織を顕微鏡で観察して、診断することを指しています。治療方針の決定や治療効果の評価など重要な仕事を担っています。主に①病理組織診断（生検組織診断、手術で摘出された臓器・組織の診断、手術中の迅速診断）、②細胞診断、③病理解剖の3つの仕事を行っています。また定期的に各診療科との症例検討会（カンファレンス）を開催し、患者さまの治療方針に関して相談する機会を設けています。

【当科の特徴】

- 1) 県内の市中病院の中で有数の診断件数があること
- 2) 検査技師4人中3人が細胞検査士であること
- 3) 各診療科とのカンファレンスを行っていること（主に婦人科、血液内科、口腔外科）
- 4) 病理解剖について臨床医との総合検討会を年4回公開で行っていること（コロナ禍にて2021年度は中止）

国立病院機構熊本医療センター

- 診察日 月曜日～金曜日
- 休診日 土・日曜日及び祝日
年末年始（12月29日～翌年1月3日）
- 受付時間 8：15～11：00
〒860-0008 熊本市中央区二の丸1-5
TEL 096(353)6501（代表）
FAX 096(325)2519
H P <https://kumamoto.hosp.go.jp/>

※ 形成外科のみ受付は、水曜日以外の13:30～16:30となります。

※ 一部の科では、午後に予約診療を行っていますが、新患、予約のない方の午後診療は行っておりません。急患はいつでも受診できます。